

(続紙 1)

京都大学	博士 (地球環境学)	氏名	秦 凡雅
論文題目	Changes in indigenous natural resource utilization regimes and land uses in Dong ethnic minority villages in southwest China (中国南西部のドン少数民族の村落における先住民の天然資源利用体制と土地利用の変化)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中国南西部のドン少数民族にみられる地域の天然資源利用と土地利用の変化を理解すること、また、彼らの天然資源利用体制から見出される伝統的生態知を明らかにすることを目的とした。カム民族としても知られるドン少数民族は人口300万人程度の、中国に存在する55の少数民族の一つである。彼らは中国南西部の貴州省、江西壮族自治区および湖南省の山岳部に居住している。また彼らは、歌謡、モミ材によって建築される独特の建築物、言語、衣装、祭事や料理によって名を知られている。山間奥地の川沿いに居住してきたため、外界との接点も少なく、限られた天然資源しかない環境の中で、ドン族は自給自足のための独特の天然資源利用体制を発達させ、長年培ってきた農業技術によって特徴的な景観を形作ってきた。しかし現在は、都市化の波によって、ドン族人口の多くは都市部に流出している。その結果、国家の文化との融合、文化的な独自性の喪失が進んだことによって、ドン族が村々で培ってきた地域の天然資源利用体制や伝統的な土地利用は変化しつつある。一方、伝統的生態知に関しては生物多様性保全に潜在的に寄与している、あるいは、持続的な資源利用計画に寄与するといった知見が多く先行研究で示されている。そのため、本研究では、ドン族の農業活動にみられる伝統的生態知の変化と現状を考察し、それが将来の世代につながるように継続させるための方策を検討することも目的とした。</p> <p>第1章では、まず、ドン少数民族の概要について述べている。次いで、調査地域である広西壮族自治区の三江地域についても紹介している。また、伝統的生態知と天然資源利用の理論、本研究で参考にした里山イニシアティブの概念について述べている。さらに、現在の中国における土地利用の問題も示した上で、本研究における論点と目的、研究の範囲について述べ、最後に本研究の構成を示している。</p> <p>第2章では、ドン族の農業活動に認められる伝統的生態知の現状を把握するために、2017年に三江地域の三つの村落で行った聞き取り調査で収集した情報の解析を行った。これに加えて、行政資料等から得た二次的なデータも三江地域におけるドン族の生活様式の変化を理解するために利用した。その結果、三つの村落における一般的な農業暦が明らかになったが、同時にそれぞれの村落で異なる点があることも示すことができた。また、本研究は、現在の農業活動はドン族の文化とは異なる国家の文化と統合したもの、あるいは伝統と現代の融合したものであるが、彼らの伝統的生態知は保たれており、さらには、政策的、社会経済的背景から新たな知識がドン族にもたらされていることを明らかにした。</p> <p>第3章では、第2章で調査を行った村落のうち高友村を対象として行った、ドン族の天然資源利用体制の変化がもたらした生業システムの点から見た伝統的生態知の変遷に注目した。高友村における伝統的里山景観と現在の里山景観のモデルを構築するために、複数の関係者へのグループでのインタビューと個人への聞き取りを行い、二つの景観のパターンの関係とそれぞれの天然資源利用体制を示した。その結果、高友村における天然資源利用体制は高齢者率の増加による相対的に弱い労働力によってより単純化されていること、一部の伝統的生態知は天然資源利用体制の変化により失われていることが示された。また、ドン族の文化的独自性は一部で維持されているものの、伝統的生態知の一</p>			

部の喪失には市場や政策の状況が影響していることが明らかになった。

第4章では、第3章と同様に高友村を対象として、2009年と2020年の衛星画像と2019年に撮影したドローン画像を用いて、急速に進む土地利用の変化を把握した。その結果、三江地域で広く茶の植栽が奨励された2009年から2019年の間には、高友村では景観の断片化が進むことによって多様になっていたが、一方で、増加する茶植栽地と椿植栽地が続くことによって断片化した土地利用を結び付け、より大きな単一栽培の空間を形成し、その結果として景観の多様性を減少させていた。各土地利用へのアクセス性については、環境に関する変数はその変化に大きく影響しており、自然に関する変数は変化のタイプに影響していた。補助金のような政策は農民の土地利用に影響を与えていた。また、道路建設や拡張といった土地利用に関する変化も認められた。調査結果から高友村における労働力の高齢化が明らかになったが、地域の天然資源は現在もドン族農民によって効果的に利用されていることが示唆された。

第5章は総合考察であり、第2章から第4章で得られた結果を統合し、ドン族の伝統的生態知に見られる変化を示した。また、そこでは人と自然の相互関係が失われつつあることを示した。さらに、政策的、あるいは社会経済的な背景がこれらの変化をもたらしていることを考察し、それらを通して、異なる受益者の協調、公的な政策に対する助言の必要性が示され、教育の実践の必要性が提示された。

第6章は結論であり、本研究における限界を示し、将来のさらなる研究の必要性を述べている。

(論文審査の結果の要旨)

近代化の名のもとに世界各地で培われてきた伝統的な天然資源利用と伝統的生態知が失われつつある。これらの知恵は近代化の波の中で変質しながらも維持されていく必要がある。本論文は、そのような問題が顕在化している中国南西部に居住するドン少数民族が維持してきた天然資源利用の実態と伝統的生態知に注目し、近代化の波の中でドン族がどのようにこれに対応してきているのか、を解析し、将来に向けた可能性について考察したものである。本論文の評価すべき点として、以下の4点が挙げられる。

1. 遠隔地であるために必要な情報が十分に得られない中で、インタビューや衛星画像とドローン画像の解析等を通して、調査地域の状況を解析し、文献等から得られる情報も加味して考察することによって、遠隔地においても重要な伝統的知見を明らかにできることを示した点は、学術的に高く評価できる。
2. 中国における少数民族が自らの文化を継承していくうえで、外部から与えられるさまざまな干渉に対応しながら行われている農業を中心とする生活行動を詳細に考察することによって示した成果は、世界の少数民族の文化の継承を考えるうえで重要な示唆を与えており、学術的に高い価値が認められる。
3. 本研究で示された近代化の波の中でもその変化に対応しつつ、伝統的生態知を維持するドン族の適応力に関する解析結果は、地球環境の劣化をくい止めるために必要な行動を示すものであり、地球環境学を考えるうえで有意義な結果を示している。
4. 国家レベルでの政策が少数民族の伝統的生態知に大きな影響を与える一方で、ドン族では新たな対応が認められたこと、少数民族が持つ伝統的な生業の価値を示したことは重要な成果であり、その社会的な意義やインパクトは高く評価できる。

以上のように、本論文は中国の少数民族について、天然資源利用の変遷及び現状と国レベルの政策等に対する適応を示し、今後のあり方を考察したものであり、地球環境学のみならず、農村計画学、生物多様性科学、民俗学の発展に寄与するところが大きい。

よって本論文は博士(地球環境学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、2022年2月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。